

聊か希望を述べることは出来る。

一、唯一の官立美術學校に重きを加ふる爲に當代の巨匠を招くことは望ましい。明治大正の豪華陣を思へば、もつと大家を網羅しても多過ぎることはない。然し、學生に對する教育を本位にして考へれば、巨匠に多くを煩はすより、年齢も少く、學生と接觸する機會の多い中堅教官陣を十二分に充實しなければならぬが、其點では舊美術學校も非常に遺憾であつたし、現在も餘りに手薄である。

一、平凡なことであるが實力の涵養に主力を注ぐこと。これは一般の風潮かも知れないが、歐洲の學生に比べても、實力が足りないうで反對に發表慾が強過ぎる。トレーニングや教則を厭がつて、早く競技會へ出たがつたり、いきなり曲を弾きたがるピアノストが居たら滑稽だが、美術界にはそれでも専門家になれる穴がある。

又卒業生の生活のことも考へるとすれば、もつと幅の廣い技術が賦與されてもいゝ。私が參觀した佛印の官立美術學校では、總ゆる材料の驅使、總ゆる方面の用途にも役立つ技術を一通り教へてゐた。土地の事情が異ふが參考にはなると思ふ。

一、科學的な指導研究が總ゆる點で缺けてゐたので、學生の饑えは満たされることが無かつた。放任でなければ「悟り」本位であつたが、悟りはずつと上のことで、其處迄は文字と言葉で十分傳へ得ると思ふ。

一、夥しい偉れた參考品を、美術館の如く學生の身邊に置くべきで、學生はそれによつて視野を廣め、理想を高めることが出来る。

。校庭には物故教授の像より見られず、教室と廊下は師範學校の如く索莫としてゐて、藝術の香氣が學校に漂よつてゐない。せめて良い複製でもと思つたが、文庫は文庫の爲の存在であり、會計からは十圓の金も引出せなかつた。そこで愛書を犠牲にして受持の教室へだけ懸けて見たが、個人所有のものには限度があり、其十年間は油繪科以外の學生ばかりだつたので繪畫に熱がなく、張合を失つて中止したが、これは實技と美術史の教官が相談して計畫的にやると必ず効果があると思はれる。

一、裸體研究は今後恐らく問題にはなるまいと思ふが、モデル不足以外の理由で彈壓され、校内にすらその賛成者が現れたことがあつたが、研究と發表とは別個のもので、醫學の研究に解剖が必須な如く、美術の基礎的研究に人體以上のものは考へられない。

(G) 其他 外國との交換展、名作模寫(製作、蒐集、模寫の美術館、製作に派遣、外國との交換等)美術作品の著作権等々。

⑬ 結城素明名誉教授となる

昭和二十年六月一日、本校は十九年改革の際に辭職したもと日本画科教授結城素明に名誉教授の称号を贈つた。素明の長期に亘つて日本画科を指導し、戦後の日本画界を担う作家を育てた功績は大きい。素明と同時に辭職した森井健介は、友人としてその人物を素明が死去した際、次のように記している。

結城素明画伯の思い出

森井健介

三月廿四日結城さん急逝後、はや満中陰忌も過ぎた頃、突然本

社から追憶話を頼まれたので、毛色の変つた側からの思出話も一興と思ひ、書綴つて見よう。元來僕は建築専門であるが、第一次世界戦争の始まつた頃、建築界の鬼才岡田信一郎君の推輓で、美術学校教授となつたが、殆んど同時に結城さんも教授となられたので、同席の關係上親しみ深く、その上結城さんと岡田さんとは親友だったので、僕も従つて昵懇の間柄となり、爾來三十年、昭和十九年美校革新の際、一同袖を連ねて辞職するまで、公私共深交を結んだ。終戦前後福島や白河の在に疎開しておられた間も特に音信多く、帰京されてからも屢々交通し、四十年余も御實際願つたものだ。想えば当時美校教授も多くは鬼籍に入り、僅かに朝倉文夫、北村西望、和田三造、田辺至、川崎小虎、森田亀之助、高村豊周の數氏が活動しているに過ぎない。何しろ最年少の僕ですら、古稀に達しているのだから無理もあるまい。

結城さんは明治卅年美校卒業後、二カ年余洋画科に入り、デッサンを勉強されたもので、其制作はいつも大胆に洋画の手法を採り、独特の写生風景画の天地を開拓したものだ。明治卅五年美校に招聘され、寺崎教室の所屬となつたからでもあるまいが、広業先生同様各流派の絵画を試作され、又挿画などもやられたものだ。美校の文庫に保管されている草花の画帳は美事なものだ。海外は勿論、地方旅行や散歩の折は、常にスケッチ帳を懐に、一木一草も目敏く筆にする、現に逝去数日前も植物園へ行つて写生したとか、僕より一廻り上の高齢でありながら、精進三昧に入つてゐるのに全く敬意を表する次第だ。かく結城さんは写生主義であるから、描き方や考え方は全く科学的、考証的で、パースペクチ

ヴにも中々精しかつた。僕もこの点で時々質問をうけ、又画面に付て批評を乞われたものだ。信濃町の聖徳絵画館の明治天皇が勅業博覧会への行幸図に於ける建物のパスについては、考証其他に手伝したものだ。此絵画は終戦直後アメリカの軍人が乱入して、明治天皇の竜顔を破損したので其補修には結城さんも大分骨折られたようだ。

結城さんの画風其他専門の事柄は門弟の方々から話されるだろうが、元來多趣味で読書家で、画家としては珍らしい程交遊広く、美術文芸界は固より、政治、經濟の方面から、学者、僧侶、重役、新聞雜誌記者、芸人等に至るまで知己頗る多く、常にお宅は千客万来の觀あり先般増上寺葬儀の折如何に各社会の人々が見えたかでも分る事だ。従て極めて常識ある社交家とも言える訳だ。又日本画科の主任としては僅か十年とはならないけれど、前任の寺崎、川合二画伯の学生に対する感化影響は皆無といつてもよい位だが、結城さんの感化は其教官生活前後四十余年間誠に顯著なもので、美校日本画は結城さんに由て出来上つたと申して差支ない位だ。之は元來塾制度によつてのみ養成されていた日本画が学校で教育されるようになり、結城さんの科学的養成法が時代の進運に適合したともいえよう。且其熱心な教授法と指導精神とを以て日本画生徒を引張つて行つた訳だ。又結城さんは内弟子なく、学生を一視同仁よく卒業生の世話をする。決して優等生のみ教込む風なきは確かに徹底したインテリ教育家で、美術の教官として単に名人というのみでは、成功せぬ好例であらう。唯其卒業生に対する影響力の大きい余り、一同から心棒として依戴される

ので、美校外からはボス視され、大分誤解された点もあるようだ。

黒田、岡田、藤島三氏を初め油画家の中には如何にも芸術家らしく、美術批評家や画商など問題にせず、権門富貴とも対等の附合をしているよう見受けられるが、日本画家は因習上兎角御茶坊主式ならざるを得ない、所謂書画屋が絵の値段の釣上、釣下を勝手にやる気味だ。此点結城さんは決して書画屋のいいなりならず、時に喧嘩したり、美術批評家にも敬意を払わず、況んや自筆の贈り物など一切しないから、絵の売価など低く、流行の御弟子などより遙かに廉価なのは誠に興味深く覚える。其代り故旧親友が特に頼めば、値段など構わず描いてくれる。嘗て地方旅行の際旅館の女中が、就寝前家宝にと懇願したら色紙など即座に書いてやるという風、金銭に無頓着、極めて恬淡たる先生だった。先ず政治家なら清濁併せ飲むという処で、中々情味豊かに包容力もあり、優秀でないお弟子をもよく面倒を見ておられた。僕は日本画家の先生の内では最も事務的に物事を処理出来る人、例えば学校長とか芸術院長でもやれば出来る人だと思われる、信頼する女房役に任される丈の器量人だと思う。それにつけても今以て芸術院長は素人の天下り人事で、よくも会員が黙って満足しているのを不思議に思えてならない。確か正木直彦先生が美術院幹事なり院長の時代に、せめて学士院並に院長互選にしようとする主張されたが、当時文部省は承知しなかつたと伝聞している。初代の森、黒田の両院長を除けば皆事務家であつて、今以て其連続である、残念至極の事ではなからうか。

僕は屢々結城さんと、所謂美術学校騒動と岡倉校長の昔話から、終戦直前の美校革新について話合い、其真相を極めたいと思つて、まだ充分果せないのは遺憾である。結城さんの岡倉、正木両先生観も実に穿つていて面白いものだ。今や天下挙つて院展系に趨つているの感あるが、猪突性の日本人もいつかは冷静に返つて、所謂美校出側も認められ、大いに発展するに違いない。其時は結城さんの主張も通り、無形の文化勲章を貰つた事になるだろう。

前にも述べた如く、結城さんは読書家であるから、西片町の旧宅までは各方面万巻の書物に埋つて、読み耽つておられたが、疎開先から吉祥寺更に現在の林町へ居を移す毎に、多数を整理された様だ。又著述に勤王画家佐藤正持、菊池容齋に付ての研究あり、次に物故美術家、文芸家の掃苔供養の記念として前後三回に亘つて墓所誌を刊行されたのは実に剴切奇特な事業で、僕も建築家の部分は喜んでお手伝いしたのである。

結城さんは画家である以上、多年書画骨董に接するの機会は多かつたようだが、自ら買い集める事は避け、公共又は箇人の美術館にて蒐集展観すべきであるとの主義で、自宅では僅かに勤王家、儒者、高僧、俳人、中国の知人の書画を愛玩するに過ぎないようだ。斎藤茂吉氏初め現代文芸家の水荃の跡など面白い。僕の一高時代の恩師夏目漱石先生との交遊も浅からず其筆になる蘇迷蘆（素明蘆をもじつたもの）の額は素晴らしい物だ。僕等教員生活に終始している者でも、調べものの際、接客で中断するのは随分困るから、結城さんのような画家は嘸かし御困りだろうと思

い、往訪の折は電話で都合をきくと、いつでも来いとの話、而も大抵二三の来客あるので、執筆に不便だろうと御尋ねしたら、困らぬ事もないが、折角訪問を受けるのだから止むを得ないしするので、夜食後一休みして後、十時頃から暁方まで執筆する、色も其積りでぬるとどうにかなると、至極アッサリ話されたのは面白かった。然し之も西片町時代で、終戦後家庭の御不幸と、移転や老境に入られたので、夜業もされなくなつた様だ。それにこの十数年間は神経痛に悩まされ、心臓肥大で好きな御酒も晩餐に一本と限られたのは誠に同情に堪えなかつた。

最後に結城さんに付特筆すべき事は二十年以前先夫人逝去後、簡易生活に遷り、和服を全廃徹底的洋服生活を始められた事だ。外出は勿論自宅におる時も凡て洋服を用い、出来れば万事洋式にされたいようだつた。日本画家としては珍らしい事で此点確かに先達であろう。僕もこれに刺戟され、日本人の衣食住も漸次洋式にして、始めて文化生活を営める信念を強めた次第だ。(五月廿二認む)

現法政大学工学部教授

『萌春』第四十三号、昭和三十二年四月